

実践① サツマイモの収穫を通して～興味や関心の広がり～（10月下旬）

《サツマイモの収穫》

1学期に園庭の畑に苗を植え、毎日水やりをして生長を見守ってきた。だんだんと生長するツルを見て、「大きくなったかな。」と収穫を楽しみにしていた。10月下旬に芋掘りをした。土を掘っていくといろいろな形や大きさのイモが収穫できた。「雲の形みたい。」「こっちは小さい。」「すごく大きいのがあった。」など、形や大きさの違いに気付き、言葉にする姿があった。たくさん収穫できたサツマイモを見て、「何個あるんだろう?」とつぶやき、数に関心をもつ姿もあった。

《収穫の後に》

畑に一番近い部屋にブルーシートを敷き、収穫後すぐにサツマイモにじっくり触れることができる場を作った。並べて数を数え始める幼児がいた。始めはそれぞれの幼児が数えていたが、今までの経験からか、10個ずつ並べる幼児がいて、全部の数が分かった。大きさごとに分けたり、はかりに乗せてみたりして、大きさや重さの違いを感じている幼児もいた。はかりのめもりを見て、めもりが動くことに興味をもって見ていたが、しばらくすると、「こっちは3（00g）」、「こっちは5（00g）」と、めもりが止まったところを見て「こっちは大きいよ。」と言う姿があった。「持ってみるとこっちは重たいね。」と重さを感じられるような言葉を掛けた。重さと大きさを同じように捉えている様子があった。

翌日、サツマイモの絵を描いた。赤・青・黄の絵の具を一人ひとりのパレットで混色して、それぞれが思うイモの色を作った。「赤っぽいかな。」「ちょっと黄色も入れてみよう。」「おひげがある。」「ぼつぼつがある。」と形や色・模様をじっくりと見ながら描いていた。



「何個あるか数えてみよう。」「こっちのほうが大きいよ。」と実際にサツマイモに触れながら興味や関心を広げていた。

「雲みたいな形だよ!」
いろいろな形や大きさのイモが収穫できた。



<○成果 △課題>

○収穫後すぐにじっくりとサツマイモに触れることができる場所・時間を作ったことで、数を数える・大きさごとにわける・重さを感じるなど様々なことに興味や関心が広がっていった。色や形をよく見ながら絵を描く経験にもつながった。

△ソラマメを数えたときの経験から10個ずつ並べて数を数えようとする姿があり、経験の積み重ねを感じた。一方で大きさと重さを同じように捉えている姿があり、実際の経験から「重さ」や「大きさ」を感じることの大切さを感じた。今後も実体験からの経験を重ねられるよう考えていきたい。

実践② 4回目の5年生との交流（11月10日）～深まっていく交流～

4回目の交流。前日から「一緒に遊ぶの楽しみ！」と心待ちにしている、経験を積み重ねていることで期待や安心感が高まっていることが感じられた。昨年度までは一緒に製作をする活動を行っていたが、幼児・児童の実態や興味・関心を担任同士で話し合い、児童が音楽会向けの活動に取り組んでいること、幼児も楽器に親しんでいて興味をもっていることから、楽器と一緒に触れる活動を考えた。

事前に5年生はどんなことを一緒に幼児としたいか、してあげたいかを話し合い、楽器の使い方を教えてあげたり、合奏を聞かせてあげたりすることを考え、準備を進めた。幼児とは事前に、前回までの交流を振り返り、5年生が楽器で一緒に遊べるように準備してくれていることを伝えた。すると、「(自分たちも)歌を(5年生に)聞いてもらうのは？」という考えが幼児から出て、学級で親しんでいる歌を聞いてもらうことにした。

当日は、5年生が迫力のある合奏を聞かせてくれて、その後に楽器に触れさせてもらった。1期の交流の時には関りに戸惑った様子もあった5年生だが、「こうやって叩くんだよ。」「上手にできたね。」と、幼児の気持ちを考えながら積極的に関わる姿が見られた。幼児は触れたことのない楽器を触らせてもらい、「すごく大きい(太鼓)のがあった!」「もっとやってみたい。」と刺激を受けていた。幼稚園での合奏の取組を今度は5年生に聞きにきてもらうことを楽しみにしている。



5年生の迫力のある合奏を真剣な表情で聞いていた。幼児は自分たちで歌いたい歌を考えて、5年生に聞いてもらった。



「こうやって持つんだよ。」
「一緒に鳴らしてみる？」
など、5年生は、楽器の演奏の仕方を幼児に分かりやすい動きや言葉で教えようとしていた。

<○成果 △課題>

- 昨年度までの活動内容にこだわらず、幼児や児童の実態を担任同士で話し合いながら活動を考えることができた。教員同士の話し合いの深まりは、小学校と幼稚園の交流を積み重ねている成果であると感じた。互いに興味や関心の高い楽器という題材を選んだことで、より児童と幼児の関りややり取りが活発になったと感じた。
- 5年生にとって、幼児と一緒にしたいことを事前に話し合ったり、幼児に伝わる伝え方を試行錯誤したりする中で、来年度の最上級生としての意識をより高める機会となった。幼児にとっては、5年生への憧れの気持ちがさらに膨らむとともに、これから取り組む合奏の活動に期待を高めることにもつながった。

4期 1年生

実践① 音楽会に向けた取組～主体的に環境に関わる子どもの姿からの行事づくり～（10月下旬～）

幼児教育の場で、生活発表会や劇遊びなどの実践を行う際、遊びを発展させていく中で劇のお話作りをしたり、生活の中で関心をもっているものを題材として取り扱うことがあると聞き、小学校の行事指導でも取り入れたいと考え、実践を行ってきた。2年前の学芸会の際には、担任していた1年生の子どもたちが生活科のピオトープ学習を通してたくさんの生き物（オタマジャクシ、かえる、とんぼ、ざりがになど）に高い関心を寄せていた。子どもたちと「学芸会の演目は何が良いか」と話し合い、「おたまじゃくしの101ちゃん」を題材として取り扱った。

同様に今回の音楽会でも、子どもたちの日々の生活や学びと関わりの深い楽曲を使用したいという教師の思いがあった。そのため児童に「生活の中で嬉しかったこと」「学習の中で嬉しかったこと」「合奏の時にあったらいいなと思う楽器」の3項目を問うアンケートを実施した。

アンケート結果（一部抜粋）

「生活の中で嬉しかったこと」

- ・大切に育てたアサガオが咲いたこと（多数）
- ・掃除や給食当番が上手になった（複数）
- ・給食を残さず食べることができたこと（複数）
- ・新しい友達ができたこと（多数）
- ・休み時間にたくさん遊べた（複数）
- など

「学習の中で嬉しかったこと」

- ・文字（ひらがな・カタカナ・漢字）が書けるようになった。（多数）
- ・アサガオが大きくなって、花が咲いた。（複数）
- ・ボール投げなどの体育の技能の向上（複数）
- ・生き物（特にカエル）をたくさん見付けたり捕まえたりした。（大多数）
- ・その他（英語や算数などの教科に関すること）
- など

「合奏の時にあったらいいなと思う楽器」

採用したもの

- ・鍵盤ハーモニカ
- ・カスタネット
- ・すず
- ・もっきん
- ・てっきん
- ・トライアングル
- ・大太鼓
- ・小太鼓
- （タンブリン）

用意できなかったもの

- ・ギター
- ・サクソ
- ・フルート
- ・トランペット
- ・ドラムセット
- ・スチールパン

上記の結果から、歌詞がアンケート結果とリンクする「きょうもあしたも一年生」の合唱、合奏「かえるのうた」、合唱「にじのむこうに」の3曲に決定した（学年だよりのタイトルが「にじいろ」で、運動会のダンスの曲が「空色」だった）。アンケートの言葉を呼び掛けの台詞に入れ、運動会でも着用した、空色に染めたTシャツを衣装にした。



運動会衣装でもある「空色Tシャツ」は、3期の草花を利用した色水遊びが発展して、染物に挑戦したもの。



「私たちも1年生のころ、同じことを考えたなあって懐かしく思ったよ」と6年生のコメント。

<○成果 △課題>

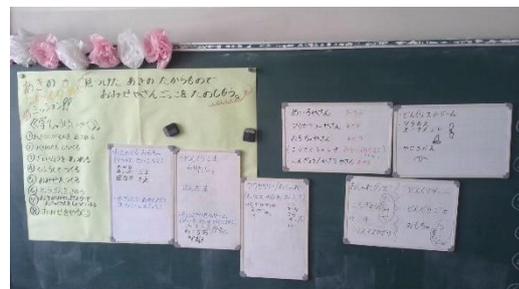
○子どもたちの関心のある出来事や生活経験が土台となる発表ができた。

△教師のねらいや意図と、子どもの思いや願いのバランスをとることに難しさを感じる。

実践② 生活「きせつとなかよし あき」～あきのたからものミッション～（10月下旬～）

3期に「ななはけラボ」で、アサガオ等を使った草花遊びについて調べていた際に、アサガオの蔓を利用したリース作りをしたいと考えた子どもたち。「飾りつけのためにどんぐりを拾いに行きたい」との声が上がり、荒川自然公園にどんぐり拾いに行くことになった。その翌日に一人の子どもが「どんぐりを拾ったので、みんなで集めたい」と言い、どんぐり入れを設置したところ、数日後に別の子が「松ぼっくりを拾った」と持ってきた。木の枝やどんぐり帽子など、発見した秋の自然物が少しずつ増えていき、「リース以外にも遊びができそう」とつぶやき始めたところに『どんぐりむらのどんぐりえん』（なかやみわ、Gakken、2013年）を読み聞かせした。秋の自然物や廃材を利用してお店屋さん祭りの準備をするどんぐりたちの話を聞きながら、次々に「幼稚園のときにやった!」「ぼくたちもやりたい!」と声がし、読み聞かせが終わるころには「秋の自然物を利用したお店屋さんごっこをしたい」という、子どもたちなりの単元のゴールができあがりつつあった。

当面の目標を「①リース飾りのためのどんぐり集め」「②秋の宝物でお店屋さんをする」の2点に定め、休み時間や休日に家族で出かけた際、荒川自然公園への校外学習などでひたすら秋の自然物を集めた。



その傍らで「ななはけラボ」や教室前のブックトラックに落ち葉や木の実を利用した工作の本をたくさん置いておき、作りたいものを探していると、廃材が複数必要なことが分かった。材料や道具、お店の準備の計画を立てる必要が出てきた際に、それらをリストアップしたり、順序を考えたりして学習計画を立てた。

また、呼びたいお客さんには「保護者、先生、上級生、主事さん、町屋幼稚園の園児」が挙がったほか、「ちょっと遠いけどぼくの保育園も呼びたい」という思いを話す子もいた。コロナ禍のため、併設園以外との直接交流は避けたが、代わりにお手紙と製作物を届けることとなった。

他教科との関わり

国語「もののなまえ」（お店屋さんごっこを通して、上位語と下位語、分類などの言葉の働きに気付く）

⇒上記の活動を題材として取り扱う。

国語「手がみでしらせよう」（便せんやはがきを用いた手紙の書き方）

⇒就学前施設に送る製作物に添える手紙を書く。

算数「たしざん」「ひきざん」（繰り上がりや繰り下がりのある計算）

⇒教科書にどんぐり拾いの場面が例示されており、自分たちの経験に置き換えて考えられる。

<○成果 △課題>

○子どもたちの探究心や出会った身近な自然の事象を契機に学びが展開できた。

○他教科との合科的・関連的な学習を推進できた。

△秋の自然物が思うように集まらないこともあった。しかし、うさぎ組（4歳児）の研究保育や保育室の環境構成の工夫を参考に、単元の途中でさらに工夫を加えることができた。

4期 2年生

実践① 生活「えがおのひみつ たんけんたい」(10月下旬～11月上旬)

3期からの継続学習である。子どもたちがした質問の回答を元に、グループごとにクイズや紙芝居を作ったり、写真を見せながら説明をしたり、ペープサートで表現したりしながらそれぞれの施設について発表できるように準備をした。



質問の答えを基にしたクイズを作成したグループ、見てきたことや質問の答えを基にして紙芝居を作成したグループ、タブレットのお絵かきソフトを使って発表したグループなど、グループごとに趣向を凝らした発表をする様子が見られた。3期の反省として『児童の希望でお店を選択させたので、最後のまとめる活動においてグループによって差ができてしまった。』という点があったので、発表前の仕上げの段階において、発表の内容や仕方などに差がつきすぎないように、いろいろな教員がグループに入って指導をした。クイズや紙芝居を作成する中で、指示棒や○×を示す棒などの小道具を作成することに集中してしまい、発表の本体になかなか着手できなかったグループもあったので、発表としてどの程度まで自由度をもたせていくべきであるかについては、途中の指導が足りない部分でもあった。

発表は、土曜日の授業公開で行い、事前にどの時間にどのグループが発表するのかを保護者に伝えて、参観してもらった。欠席者等がいて思うように発表できなかったグループもあるが、施設見学にもお手伝いいただいた保護者の参観もあり、子どもたちがどのように学習を進め、どんなことを学んだのかについて発表する様子を見ていただけた。



発表の仕方もグループによってさまざまだったが、特にクイズを作ったグループは、画用紙に書いたものを見せるだけでなく、電子黒板に写して見えやすくしたり、写真も用いて発表したりと工夫する姿が見られた。これまでもグループでの活動はいろいろと取り入れてきたが、こうして発表の形まで自分たちで行うのは初めてだったので、子どもたちにとってもよい経験となった。

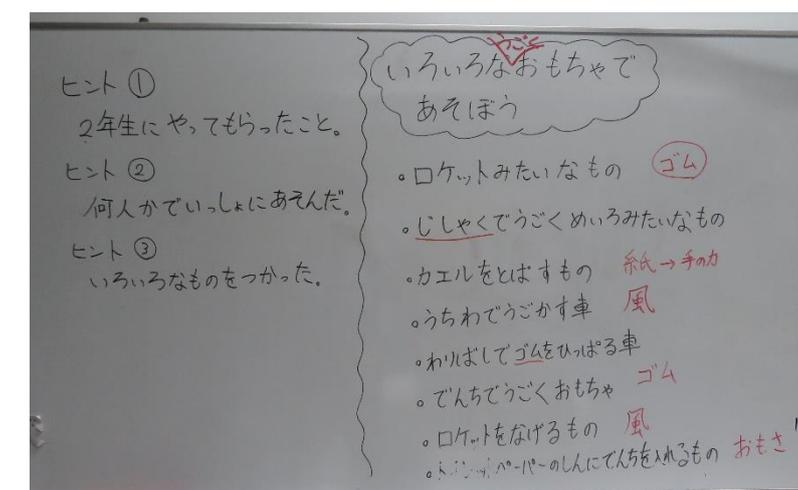
<○成果 △課題>

○主体的に質問を考えたり、施設の見学をしたりするだけでなく、どのように発表をしたらよいかについてよりよく考えようとする児童が多く見られた。

△発表の内容や仕方、どの項目を取り上げるかなど、グループによって多岐に渡ったので、教師側の見取りが大変な面もあった。

実践② 生活「作って ためして」(11月中旬～12月)

4期～5期にまたがる学習である。3年生以降の理科的な学びにつながっていくよう、風やゴム、重さなどの動力を用いたおもちゃ作りを行い、自分たちでよりよくするために工夫したり、楽しく遊んだり、下学年の子たちに遊んでもらったりする活動である。子どもたちは1年生の時に、2年生が同様にいった学習で遊ばせてもらったので、まずはその時の経験を想起することから始めた。



次に、去年は2年生に教えてもらったように、自分たちは作ったおもちゃをどうしたいのかを話し合った。去年のように、「1年生に遊んでもらう」だけでなく、右図のように「幼稚園保育園の子たちにも遊んでもらいたい。」「自分たちでも遊んでみたい。」という遊び方のことだったり、「説明書を書く。」「やってみて確かめたり、改良したりしたい。」など作った後のことだったり意見として出た。今後の学習において、取り組もうとしているものだったので、子どもから出た意見として取り上げて自分ごととしての学習につなげていけるようにしていく。

初めの数時間は、いろいろな遊びを試してみて、自分が作りたいおもちゃをどれにするかを考えていった。どんなものを使うとどんな動きをするのか、おもしろい動きをするものがあるかなど、取り組んでいる様子が見られた。今後は、自分たちの作りたいおもちゃを作っていく、うまくいったことやもっとよくしたいことなどを考えながら、学習を進めていきたい。

<○成果 △課題>

○教科書にも載っているが、作って遊ぶだけでなく、最終目的のゴールをどうしたいかという思いをしっかりと引き出し、目的をもって活動に取り組む始めることができた。

△個別、又はグループで取り組むかなどどのような形態で進めていくかを検討する必要がある。

左図のように、1つずつヒントを出しながら去年どんなことをしてもらったのかを少しずつ想起させていった。初めは「おもちゃで遊んだ」ということだけだったが、どんなおもちゃだったのかを1つずつ聞いていく中で「これは、ただのおもちゃだったかな。」と問い返し、いろいろな動きがあるおもちゃ出るということに気付かせていった。2, 3種類のおもちゃの動きを出させた後は、ほかのおもちゃがどのような動きをするのかについて考えることができた。

